

## 2023年8月20日 説教「自分を低くする人」

ルカの福音書 18章 9～14節

使徒パウロの第1次伝道旅行の記事が終わりました。そこで、今朝は「自分の日を正しく数える」(詩篇 90:12)に関連して、ルカの福音書から学びます。5月21日の聖書箇所「失望せずに祈れ」に続く部分です。



### 1. キリストのたとえ話 (9～10節)

①義人だと自任する人に (9) **「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。」**

イエス・キリストのお言葉です。キリストは、自分を義人だと自任している人に対して語られます。彼は他人と比較して、自分は優れていると判断しています。そして、他の人々を見下しているのです。そもそも「義人はいない。ひとりもない」(ローマ 3:10)とあるように、自らを義人だとすること自体に問題があるのです。そのような人々に、イエスはたとえ話をされました。

②ふたりの人 (10) **「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとは取税人であった。」**

このたとえ話では、二人の人が比べられています。二人とも宮に上っていったのです。祈るためにです。パリサイ人と取税人です。パリサイ人とは、ユダヤ教のパリサイ派に属する人達です。彼らは厳格な律法主義で、律法を厳格に解釈し、それを忠実に守ろうとする特徴がありました。取税人は、ローマ帝国の税金を取りたてる徴税請負人で集金に当たる下級税吏でした。ローマ帝国は直接に徴収せず、徴税請負人に仕事をまかせました。まかされた者たちは、相当の利幅をとって、私腹を肥やしたのです。取税人だった人の中には、イエスの弟子となったレビ(マタイ)や、エリコに住み、キリストに出会い、救われたザアカイがいます。

### 2. パリサイ人の祈り (11～12節)

①自信に満ちた祈り (11) **「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正をする者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようでないことを、感謝します。』」**

このたとえ話において、パリサイ人が心の中でした祈りは、他の人々との比較でした。また、自分が罪人ではないことを感謝していますが、逆に彼が自分の罪というものを、いかに浅く考えているかを露呈しています。神の前に、自分がいかに罪深い者であるかを見ようとしていません。神の前に真摯に出るときに、取税人を見下すことなどできなかったはずで。

②断食と献金 (12) **「『私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」**

さらに、彼は自らの信仰実践を誇っています。第一に週に二度の断食を守っていると述べます。断食は一定期間を罪の自覚をもって、神の前に悔い改めることを目的としていました。第二に自分の経済収入の十分の一をささげている(マラキ3:10)と宣言したのです。

### 3. 義と認められた人は (13~14 節)

#### ①自分の胸をたたき (13) 「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」

イエス・キリストのたとえは続きます。パリサイ人とは対照的な取税人です。彼は宮の中で堂々と立つことはできず、祈りの座から遠く離れて立ちました。そして、目を天に向けることもためらい、少しおどおどしながら、神を畏れました。そして、自分の胸をたたいて祈ったというのです。その内容は、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と自らの罪を率直に認めたと上で、そんな者への憐みを願い求めているのです。

#### ②キリストの裁定 (14) 「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

このたとえ話にはパリサイ人と取税人が出てきました。人間的な目で見れば、パリサイ人は立派です。本人も取税人と比べれば、段違いに優れていると思っっているのです。ですから、彼は自分こそ神から選ばれて義と認められると考えていました。ところが、このたとえ話を裁定するイエス・キリストは、取税人が義と認められ(救われ)家に帰った、と言われるのです。その理由としては、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くするものは高くされるからです」とされています。ここでは、パリサイ人が自分を高くする人で、取税人が自分を低くする人であることは間違いないところです。自分を高く評価したパリサイ人は、神によっては評価されず、自分を低く評価した取税人は、神によって高く評価されたのです。

#### 《結論》

三つのポイントで結論に導かれていきたいと思います。

第一に、イエス・キリストがここでなさったたとえ話のなかで、パリサイ人はどうして義と認められなかったのでしょうか。答えはキリスト御自身が述べておられます。「自分を高くした」からです。「自分を高くする」とは、このたとえにおいては、どの部分でしょうか。彼がゆるする者でも、不正をする者でも姦淫する者ではないと自覚し、週に二度断食をし、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげている、という信仰実践でしょうか。それらは、全否定されるものではありません。問題は、パリサイ人が「神よ。私はほかの人々のように」と言って、本来は神の前になされるべき信仰の実践を、人間との比較にしまい、自分を優れた信仰者だと誇っているところです。さらに彼は、「ことにこの取税人のようでないことを感謝します。」と言っていますが、取税人を見下したうえで、自分が神のみ旨にかなった者であることを感謝するとしています。パリサイ人は自分の実像を全く見誤ってしまっています。なぜなら、神は人の外側の行動とともに、心の内側をも同時に見ておられるからです。その動機がどこにあるのかを見ておられるのです。パリサイ人は律法を守り行っていたでしょう。しかし、他の人との比較に心が傾き、他より勝っているという自負心を先立て

ました。彼は自分を高くする人でした。高慢な心が、彼を支配していたのです。その結果、その行いを自己宣伝のようにしてしまったのです。キリストはパリサイ人を義とはお認めになりませんでした。

第二に、取税人はどうして義と認められたのでしょうか。彼は確かに、律法を犯し、神の望むことを行って来たとはいえません。あのザアカイがそうであったように、不当な税金の取り立てをして私服を肥やしていたでしょう。自他共に罪人であることを認めていたのです。ですから、いざ宮に上って神の御前に入る時になって、自分の罪が心に迫ってきて、後ずさりするような状態でした。彼は御座に近寄ることができませんでした。目を天に向けることもできませんでした。大切なことは、この時に彼は他人のことなど考えていないことでした。他の人と比べるようなこともありませんでした。ただ、神の前に自分の罪を意識したのです。神を侮り、平気で不正を働いてきたことを心に覚えて、胸がつかまってくるような気がしました。そして、もはや自分ではどうにもならず、胸をたたいて、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と祈ったのです。ここに彼の真実な祈りがあります。神さまは、この祈りを受け入れてくださいました。彼は「自分を低くした人」でした。神の前にへりくだった彼が義と認められたのです。神によって高くされたのです。

第三に、あなたは、このたとえ話を読んで、パリサイ人的な自分を発見しませんか。他人との比較で、自分の行動を測ってはいないでしょうか。あの人に比べればまだ、私はそれなりに社会に貢献している、教会のためにも人並み以上に役立っているとか、何につけ他人と見比べて自己評価する傾向はないでしょうか。また、自分の行動についても、聖書の戒めに概ね背いていないと思っているかもしれませんが、しかし、私たちの行動は他人が基準になるのではなく、御言葉と主ご自身が基準なのです。言い方を換えれば、主御自身の御前に立った時に、私たちはどのように向かい合うかということです。取税人は目を天に向けることすらできず、うなだれて、罪人の私を憐れんで下さいと、すがりばかりでした。あなたは自分は取税人ほどの罪人ではないと思うかもしれませんが、しかし、聖なる神、義なる神の前に出るときに、一人として堂々と立つことができるものはいないのです。この取税人のように、心を低くし、罪を認めて告白し、主のあわれみを乞うところに、主は働いて下さるのです。

「神へのいけにえは、砕かれた霊、砕かれた、悔いた心、神よ。あなたは、それをさげすまれません。」(詩篇 51:17)。罪を犯したダビデの悔い改めの詩篇の一節です。岩のごとく固い心が砕かれ、取税人のように、ただ主の前に出ることを、主は私たちにも促されているのです。

計らずも、先週の祈禱会后に、礼拝前の過ごし方が話題となりました。罪の悔い改めをして、礼拝に臨むことの大切さが確認されました。人の情報を得ようとするより前に、主を礼拝するにあたっては、罪の告白することを優先したいのです。そして、主からの赦しをいただいて、心を礼拝に集中して臨んでいきましょう。また、日常生活では、神と人の前に自分を低くする人として歩めるよう祈っていきましょう。主の恵みによる導きが備えられますように。